平成18年10月号 No.360

なかま

発　行
佐倉市立中央公民館
なかま編集係
〒285-0025
佐倉市鏑木町198-3
電話(043)485-1801

1～5ページ　創刊30周年記念特集
6ページ　木槿の咲く道・・・清澤瞳子　自然と遊ぶ愉しみ・・・西尾亮常
7ページ　世代交代・・・・・吉見文之　詩吟と私・・・・・・・菅波　卓

創刊30周年記念特集

今月号は、『なかま』が創刊されてから三十年が経過し、ちょうど三六〇号になりました。これまで各節目には特集を組み、色々な記事を掲載してきました。今回もこの節目にあたり、創刊からのいきさつや苦労話などをご存知の方々に集まっていただいて三十年の歩みを座談会形式で振り返り、今後への道しるべを模索しました。（敬称略）

励ましあいの媒体になるように

『なかま』創刊のねらい

司会　それでは『なかま』の創刊のいきさつからお話をいただきましょうか。

金井　昭和五十一年十一月に公民館の当時の長寿大学生有志が創刊した「長寿大学ニュース」がその始まりで毎月一回の発行でした。

長谷川　そうでもなく、一面の機関紙という目的からでしょうか・・。

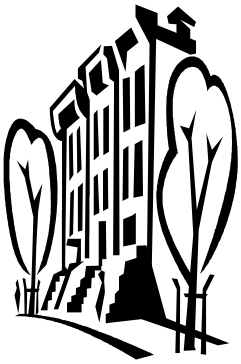
永見　長谷川さんは二十年くらいやっていますが、当初どういう趣旨だったのですか。やはり長寿大学の学生同士だけの・・。

そして、半年後の翌年五十二年五月から公民館事業に引き継がれ、名称が「高齢者だより『なかま』」になりました。

司会　名称は、その当時の学生同士が意見交換する仲間には町の有力者に原稿をお願いしたりもしていました。

司会　そうしてある程度号を重ねていくうちに公民館の事業にさせていただいたということですね。最初の頃は真剣に発行の目的などが考えられたのでしょうか。

内田　二〇〇号記念のときに『なかま』を作った当時の館長高橋三千男先生に原稿を依頼しました。それによると、当時中央公民館を利用している高齢者を対象にした情報紙が欲しく、その編集は高齢者のボランティアでやりたい、公民館は印刷費を出すが編集には口を出さない、原稿から発行まですべて高齢者の手仕事にして刊行してみようと創刊されたのが高齢者だよりの『なかま』であり、それ以来休刊されることなく発行されてきており、これからは高齢者同士の励まし合いが大切だから、『なかま』がその媒体となることを願っている、という主旨が述べられています。



大学の変革期でも
脈々たる『なかま』

司会　市民カレッジになったのは何年位前ですか。

内田　十四年前の平成四年です。私が平成元年四月にここに赴任した時、高齢者短期大学があり十一期生十二期生が在校中でした。さらに生きがい学園が平行して運営されており、この辺が、新しい大学構想を考えていく時期でもあったのです。そして、高齢者短期大学と生きがい学園から佐倉市民カレッジへの移行時期に在職していたのですが、大学の形が変わっていく変革期でも『なかま』は脈々と流れていました。短大生からも編集委員を選出しており紙面について一面はどうする、二面三面はどうする、最後のページをどう考えればよいかと絶えず考えていましたね。時代に合わせて「このページはこれでよいのか」と切磋琢磨していたように思います。

安田　お話を伺っていると、今よりよっぽど編集委員会らしいですね。（笑い）

「高齢者だより」外す
全体見直しの一環で

司会　それにしてもずっと「高齢者だより」ということでやってこられたのですね。「高齢者だより」という言葉が外れたのは何時ごろで、どういう思いで外したのでしょうか。

永見　それほど古くないでしょう。四、五年前かな・・。ようするに高齢者と言われるのが嫌な面もあるようです。

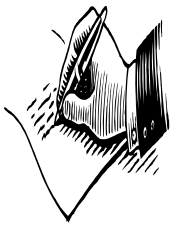
金井　資料によると、平成十五年二月十三日に編集会議をやりまして、そこでとりあえず結論が出ました。

山田　考え方の底流は企業の定年とリンクしています。五十五歳定年が六十歳になり、今や六十五歳です。昔は五十歳が年寄りのイメージでしたが、今や八十五歳でも元気でおられる。このように変化してきた時代に、高齢者という言葉に抵抗が皆さんあったのは確かです。ちょうどわれわれが三〇〇号の記念号を発行するに当たり、紙面づくりが今のままで良いかどうかを調べました。「高齢者だより『なかま』」の使命は高齢者に生きがいを与え、孤立感や寂しさから開放される心の交流の場を提供することだ、と一〇〇号の五頁に出ています。これを現時点で理念として理解できるか議論した結果、継承していくことになりました。『なかま』の編集に携わる者として、それを達成する手段として何があるかを検討し次の五つにまとめました。

① 情報を交換する
② 新しい知識を吸収する
③ 日常の感慨を語り合う
④ お互いの趣味を披露し
⑤ 希望と意見を述べ合う

という場作りを『なかま』で実現しようということですね。そして、皆が簡単に手を伸ばせるような紙面であるべきだ、ということでレイアウトを変えたのです。タイトル、文字の大きさ、中面の記事タイトルが表紙を見ただけですぐ判るようにしようとか、委員の有志が工夫して作ってきたのです。こんなこと等が踏み台となり、その時に「高齢者だより」を外すことになったのです。また、見直しに当り、カレッジ在校生全員からアンケートを頂き参考にしました。

金井　平成十五年四月号から、今山田さんが言われたように、表紙の題字部分のレイアウトが新しくなりました。



山田　また議論の中でひとつの意見が出ました。公民館の入り口に『なかま』が積んであるが大勢の市民が出入りしているのにこれを手にする人が少ない。どんどんもって行ってほしいが、「高齢者だより」のタイトルがネックだ。市民一般の投稿ということを考えると、若い人の投稿もあって良いじゃないかと。『なかま』ということであれば、めだかの学校のような小さな集団の情報交換紙的なものではなく、もっと読者層を広げなくては、と色々な意見がありました。

十二年前の発行部数
すでに一〇〇〇部

安田　永見さんや金井さんが最初に編集委員になった当時の発行部数は？

金井　一〇〇〇部です。

司会　えっ、もうそのとき既に一〇〇〇部ですか。現在カレッジ生には全員配られていますか。

半田　一年生だけ全員配布。二年生以上の方は事務室の窓口から持って行ってもらいます。私は安田さんと同じ年に公民館に来たのですが、一年目は窓口に置いてもそんなにはけませんでした。二年三年と経るにつれて、足しても足しても窓口の分が無くなってしまうのです。今では、多い時で一三〇〇部ほどにもなっています。

永見　公民館の一般の利用者数はどれ位ですか。

半田　年間に延べ人数で十万人程はあります。

一同　そんなに!!

永見　すごいね、十万人というのは。一日に二五〇人から三〇〇人位になる。

時には特集企画を
詩や短歌で魅力も

司会　テーマを決めて投稿を募集したことがあるそうですね。

加瀬　私が保存している『なかま』は平成十年三月から十八年です。その間にテーマを決めて原稿募集したのはお正月が二回、ボランティアが一回でした。

司会　最近そういうことがありませんね。

松井　おととし一回、ボランティアでありますね。

加瀬　そのボランティアは平成十六年五月から七月に黒板で募集し、九月と十月に掲載されています。

安田　原稿が沢山集まったので掲載期間を長くしたのでした。

佐藤　たまには特集号的なものがあっても良いと思います。例えば今回ですと三十周年ですから三十年間の社会の推移と公民館というテーマが考えられるかも知れません。

司会　テーマを決めて募集するという方法、これからもやって行くと良いですね。

山田　原稿を掘り起こす意味でも良いと思います。

加瀬　それと平成十年三月から十八年迄で散文詩が一つだけ入っていました。

司会　詩や俳句、川柳、短歌はお目にかかっていませんね。

松井　川柳といえば昨年の文化祭の時の川柳が・・・。

長田　すばらしかった。いつも人が集まっていましたね。

加瀬　編集委員になってカレッジの友達に投稿をお願いしていたが、カレッジを終えると投稿も終ってしまう。しかし、佐藤さんのお名前は何回もお見受けします。文章を書くのがお好きなのかなと思うのですが。

佐藤　下手の横好きでよ。

司会　編集のことについて、あるいは投稿者として、また他にお話やご意見がありましたらどうぞ。

山田　私が編集委員をやっていた時に、どれだけ編集委員が原稿を集めてくるか調査したことがありました。何回も投稿してくれる人はありがたいのですが、もっと広範囲な人からの投稿も欲しい。その意味でカレッジ以外の人の原稿をいっぱい集めてきました。町の中で、付き合いの範囲で。そういう意味で集め方をちょっと工夫したほうが良いかなと感じました。

内田　私が携わっていた頃には季節感を出す工夫をし、三ヶ月前から原稿をお願いするのですが誰に頼むかと何時も悩んで大変でした。『なかま』に限らずどこでも原稿を集めるのは大変だと思います。でも今度は一般に広げた時、色々な方からいろんな原稿が殺到することを想定しておく必要がありますね。今後幅広くやっていくのならどこまでがフリーなのか『なかま』の掲載基準みたいなものを確立しておく必要がありますね。

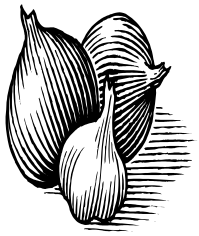
永見　宗教関係とイデオロギー関係はご遠慮くださいってね。

司会　かなり色々な考え方がありますから、そこをどうするか。

安田　難しいね。

司会　とりあえずそういう意味では『なかま』がどういう趣旨で発行されているのか、という基本的なことを整理していく必要があるのではないでしょうか。

山田　それにしてもカレッジの卒業生が毎年一〇〇人いるのだから、バックグランドになるのですよ。その中の一割が投稿してくれれば良いのだが。



司会　次は『なかま』の配布方法について伺います。具体的にどんなところに配られているのか。事務局の方からお知らせください。

半田　中央公民館でカレッジ一年生に配ります。あとは事務室の窓口に置いてあります。他には市内の公民館、図書館、駅、聖隷病院、志津コミュニティセンター、ミレニアムセンター佐倉、佐倉老幼の館、ミウズ、京成佐倉駅から志津駅の四駅、ＪＲ佐倉駅等です。

安田　京成の駅に置く時、駅ごとに折衝していたのですが主要駅の管轄があって手間取りましたが、本社の担当管理者が了承すると全駅置けると教わり、半田さんから連絡してもらいＯＫになりました。

印刷まで自前制作
黒子に徹する公民館

永見　ところで印刷は誰がやっているのですか。

半田　私ども中央公民館です。

永見　大変でしょう。

半田　二つ折りにする作業が大変です。皆さんが一生懸命書いてくださった原稿で、編集会議でも懸命に議論した原稿ですから、印刷する際は裏表がズレないように細心の注意を払っています。刷っている間に濃くなったり薄くなったりするのでよく見てやってくれています。

山田　とりあえず編集委員の何人かが応援してみると良いのではないですか。

半田　実はやっていただいたことがあるのです。加瀬さんと松井さんを始め数人の方に最初お手伝いいただいたことがあります。全部二つに折って、配布表にしたがって封筒にお手紙も入れて切手を貼ってという作業を行っていただきました。

究極は、ターゲットと優れたコンテンツ

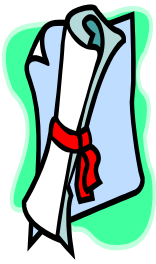
山田　私も比較的『なかま』をよく目にすることが多くなりいいなと思っているのですが、本当の狙いは誰に読ませたいのかということになると思います。それが、編集の基本だと思います。

司会　誰に読ませたいか？

山田　印刷物を公刊するということは誰に読んでもらいたいのかをイメージすることです。

司会　そういうことを念頭において、特に一面四面、編集担当としては一番気を使っていかねばならないと思います。

山田　自己満足ではだめですよ。自分の身内に配るだけでは・・。読んでもらって、それが『なかま』の発行する理念と合って影響を与えるということですからね。



『なかま』編集会議成人善行表彰受く

司会　ところで、『なかま』の編集会議が平成九年十一月に社団法人日本善行会から表彰された時の表彰状が中央公民館のロビーに飾られていますが、この経緯についてお話を願います。

長谷川　平成九年十一月十九日に同会より、高齢者だより『なかま』の編集会議を成人善行表彰する旨の通知がありました。十一月二十八日に表彰会場である明治神宮参集殿に私と篠塚晴海さんが出席しまして、表彰状と記念の盾を授与されました。正直のところ表彰状と盾を手にした時は、自分たちの活動が認められたわけであり目頭が熱くなりました。

話が長くなりますが、同会は昭和十二年に設立され、善行表彰ならびに普及と実践を通じての明るく住みよい環境づくりに努め、国の発展と国際親善に寄与することが目的で、平成十三年に内閣府所管となり現在も活動しています。この年の表彰は、四十七回目で全国から八〇〇余の推薦があり、同会が善行調査委員、関係官庁への調査依頼をし、さらには選考委員が『なかま』が対象となった公共生活への貢献・事故防止・社会福祉・自然文化財愛護等の九分野で厳正な審査を経て行われたものです。

司会　それでは大体ご意見も出尽くしたと思いますので、終わりにいたします。貴重なご意見どうもありがとうございました。

〔座談会出席者〕

〔発言順・敬称略〕

金井義彰　カレッジ三期
永見　一　〃　三期
長谷川忠雄（高齢者）短期大七期
内田儀久　中央公民館長
安田齊治　カレッジ十三期
山田　滋　〃　九期
半田励子　中央公民館職員
加瀬清子　カレッジ七期
松井喜美恵　〃　十二期
佐藤　寛　〃　三期
長田紀子　〃　十四期

司会
岩渕幸雄　カレッジ十四期

資料

長寿大学
中央公民館の高齢者教育事業として昭和四十六年に一年制で設立。昭和五十三年五月設立の高齢者短期大学に引き継ぐ。

市民カレッジ
正式名称は佐倉市民カレッジ。中央公民館の高齢者教育事業の完成形として平成四年五月に四年制で設立。現在十五期生までが在学中。

木槿（むくげ）の咲く道

昭和四十年初め、このまちに住み、東京まで通勤をしていた。未舗装道で、満員の客を乗せたバスの揺れは激しかった。そんなある日、母とバスに揺られ駅に向かった。

「あの畑に咲く花は、なーに」

「木槿よ。ほら、〝道の辺の木槿は馬に喰われけり〟って言う芭蕉の句があったでしょう。あの、木槿よ」と。

満員のバスから降りた私達に、白髪の婦人が遠慮深げに声をかけてきた。

「失礼ですが、バスから見たあのお花の名前と、芭蕉とかの句をお教え頂けませんでしょうか」と。一瞬驚いた母でしたが、バックから手帳をだし素早く書き、一頁を裂き渡した。

「主人のリハビリに付き添い、この道を通った時、花の名を問われたが判らずにいたので早速主人に知らせます」と、よろこんでいた。

京都西陣の叔母の家は、土間廊下が、玄関から座敷の横を通り、更に織機のある土間を抜け、中庭まで続いている。

中庭の奥は茶室、叔父がよく季節の和菓子を添えてお茶をたてて迎えてくれた。

そんな京都の家での夏の朝、中庭に咲く一輪の花に出会う。

「紫のこの花は、京都では、祇園護りというて、どこのお家でも大事にしてまっせ」と叔母は言っていた。朝だけ美しい姿を見せ、夕べにしぼむはかなさのたとえに「槿花一朝之栄」と言われている。

こんな木槿の咲く道が、ユーカリ団地から二九六へ抜ける近道としてある。道の両側に三米ほどの木槿、緑のトンネル。私は好んでこの道を通る。

木槿の中には、日を越えて咲いているものもある。花の咲く夏の日、この道をどうぞ。

（井野　清澤　瞳子）

自然と遊ぶ愉しみ

四季の中で梅雨の時期がくると日々の生活スタイルが変わってくる。雨模様の鬱陶しいこの時こそ愉しむ自然が我々に語りかけてくれる。梅雨空に似合うのがアジサイと花菖蒲。晴れた日より数段美しく見える。今年は行けなかったが鎌倉成就院のアジサイをテレビの生中継で見た。絶景のロケーションが自然と調和し心が洗われる思いがした。早速城址公園の菖蒲園と周りのアジサイを見に数回散歩を兼ね、写真やスケッチを愉しむ。丁度ある雑誌の編集者より花菖蒲とアヤメ、カキツバタの見分け方を教わる。花菖蒲は花弁の元が黄色、カキツバタは白、アヤメは網目状の模様が特徴とのことで観賞する愉しみが増した。

七月に入ると時折夏の訪れを予感する太陽が雲間の青空から照りつける頃、蓮始開という季語のようにハスが初めて開く。六月二十九日の新聞に古代大賀ハスが開花した記事が載り、佐倉で咲くのはこれからで印旛沼サイクリングロードの北印旛沼本埜村とロード終点周辺安食でみられるが、やはり房総のむらで坂田ヶ池の蓮は白いものもあり見事です。

私にとり自然の恵みで楽しむことを書けば、枚挙にいとまがないが一〇数年来一番楽しんでいることは、梅干作りで、今年は重しを使わず塩と焼酎とジッパー付のビニール袋で作ることを試みている。昔からの漬け方のものは南高梅で漬け、既に赤じそも入れて土用干しを待つのみ。まだ庭の白加賀梅は完熟寸前の黄色くなるのを待って残してある。今年は少し遅い状態で実はかなり大きいので丹精して漬け込み、仕上げを楽しみたい。

（宮前　西尾　亮常）

世代交代

ある高校同窓会の役員会が揺れている。震源は、郷里を舞台とする映画への協賛の仕方である。意見の相違は地元に対する愛着心の持ち方によるもので、同時に世代間の意識の差であるともいえる。

この同窓会は、かつて旧制中学の大先輩から、執行部を一気に十歳以上も若返らせた経験を持つ。それは十年前のことで、周囲を驚かせた。その頃若かった我々も、既に当時の旧制卒業世代の年齢に近い。そろそろ次の世代にバトンを渡しても良い時期に来ている。それにしても、引き継ぐべき次の世代がいることは幸せである。

一方では、世代交代が思うに任せず困っているところがある。囲碁の同好会である高校や大学の同窓会の囲碁会（囲碁部のＯＢ会ではなく、同窓生の囲碁愛好家の集まり）は、どこも、若手が居なくて苦労しているようだ。私の所属する囲碁会も、二十年前の新人が、未だに最年少に近い。少子高齢化を先取りしているかのようだ。

しかし、さすがにプロの世界は若手も健在だ。ある著名な元名人が言っていた。「自分より若いものにタイトルを取られても仕方がないが、同年代や年長者に奪われるのは自分が弱いせいだ。」世代交代を素直に受け入れようとする気持ちが表われている。同時に、そのことは進化を伴うものであることを雄弁に物語っている。

世代交代は、政治の世界でも、経済界でもそのタイミングが難しい。大した仕事をしている訳でもないが、私も間もなく六五歳を迎える。仕事もその時期に来ていることは確かだ。

世代交代は、必然性があると共に、多分に意識の問題でもあり、意志の問題でもある。

（宮ノ台　吉見　文之）

詩吟と私

詩吟は、私にとって生涯の趣味だと思っております。

私は子供の頃から、重度の赤面症に悩んでおりました。家族以外の人に話しかけられたり、何か聞かれたりするとどもってしまいました。そんなときは相手が何を言っているのか聞こえなくなります。すると自然に涙がでて、相手の顔も見えなくなってしまいました。もう毎日が自分とのたたかいでした。

そんな時、江東区のある会社に入社しました。たしか私が二十四歳位だったと思います。その会社には、野球部や詩吟部がありました。詩吟部の部長さんが「赤面症で悩んでいるのは君だけではない。自分の心身を鍛える努力をすれば、おのずと解消できる」と言って入部を勧めてくれました。

私は、悩みに悩んだ末に一大決心をし、詩吟部に入部しました。はじめのうちは、教本を小さな声で読み、人が近づいてきたら本を閉じてしまったりの状況でした。漸く声をだせたのは十日位過ぎてからでした。

半年も過ぎた頃に、江東区の各会社や学校の詩吟部の大会があり、初めて舞台に立つことができました。さらに慣れるにしたがい、九段会館や日比谷公会堂の大舞台にも出演するまでになりました。このときには、福島の両親や妻・子供たちも大変喜んでくれました。

その後は、自分と同じように悩み、苦しんでいる人の力になれたらと考え、中央公民館で少人数ですが詩吟教室を開いております。

赤面症でお困りの方、人前で話すことが苦手な方は、ご相談に応じますのでお気兼なく公民館を覗いてみて下さい。

（弥勒町　菅波　卓）

10月の黒板

☆☆☆　『なかま』が創刊30周年を迎えました　☆☆☆

今回は創刊30周年記念号として、特集を掲載し通常の2倍の8ページでお届けします。
今後とも『なかま』ご愛読のほど、よろしくお願いします。

☆☆☆　『なかま』原稿募集のお知らせ　☆☆☆

『なかま』の2～3面は、市内の皆様の投稿による随筆で構成されています。
原稿は随時募集しています。

☆☆☆　健康講座受講者募集のお知らせ　☆☆☆

健康講座　～自然散策・森林と巨木を訪ねて～

日時:　平成18年10月21日(土)午前9時～12時
集合:　午前9時　ユーカリが丘駅改札口
対象:　市内在住の一般成人30名
内容:　志津地区の森林と巨木の散策
講師:　森林と巨木を訪ねる会
費用:　50円(保険料)
申込み:　中央公民館へ電話

お問い合わせ:　佐倉市立中央公民館（第2、第4月曜日は休館日です）
電話　485-1801
URL://www.city.sakura.chiba.jp/kominkan/cyuuou/index.htm

さくら道

「旧堀田家住宅」が七月五日重要文化財に指定された。全国で重文二二八六件。内国宝二一三あるなかで文化財指定の理由は、現存する希少な明治期の旧大名家の邸宅で、普請文書が多数残され、住居五棟、門、門番所、土蔵などで構成されていること。工事内容、建築過程が明らかなことなどで、このような建築はあまりない。

現在知られている旧堀田邸と同様な遺例は、松戸の戸定邸、鹿児島の磯御殿だけである。隣接する庭園も二〇〇一年に県の指定文化財名勝になっている。秋は紅葉、冬は山茶花、椿、春は梅、桜、夏は百日紅など四季折々の花がたのしめる明治式庭園となっている。庭の斜面には多くの木々があり、飛来する小鳥のさえずりを聴きながら散策してはいかが。

あとがき

『なかま』は今月号で三十周年、三六〇号をお届けすることになりました。この記念号に掲載されている座談会で、歴代の編集委員が切磋琢磨し、脈々と繋いで来た状況を、見て取って頂けるのではと思っています。

また、この期間に掲載された投稿文の数々も、単純に計算して一四四〇篇。継続は力なりといいますが、まさに積み上げられた実績の重みを感じます。

三十周年は一つの通過点に過ぎません。編集委員としてはこれからも益々力を注ぎ、『なかま』が皆様の生きがいに幾許かでも貢献出来るように努めて参りたいと思っています。

とは言え、全ては読者あっての『なかま』です。今後ともご愛読と、ご投稿をお願い申し上げます。

（田中）